

マタイの福音書 24 章 1～14 節までを今朝のテキストにいたします。このマタイの 24 章は、イエス・キリストの地上における最後の説教の部分です。舞台はオリーブ山です。オリーブ山ということで『第二の山上の説教』などとも呼ばれます。有名な“山上の説教”、“山上の垂訓”というのは、マタイの福音書の中では 5～7 章のところですが、それに対して、ここもオリーブ山ということで、山の上での説教。これはイエスの地上の最後の、公宣教の最後の説教ということで『第二の山上の説教』などとも呼ばれます。その説教の主題、テーマは、『世の終わり』であります。最後のメッセージの主題は『世の終わり』ということで、これは終末などとも呼ばれます。weekend ではありません。その週末ではなくて、世の終わりの終末です。

昨今皆さんもニュース等で「本当に世も末だ。」というような事件、いろんな出来事を目にしているかと思います。ある航空会社の機長が全裸で女性の下着を盗もうとしていたところを警察官に見つかって裸で逃げたと。最近もそういうニュースがありました。飛行機の機長がそんなことをしているわけです。また警察官が盗撮をしたとか。「世も末だ。情けない。」そんなことを皆さんも思われることもあると思うのですが、イエス・キリストはマタイの 24 章の中で、文字通り世の末にはこのような前兆が起こる。このような兆候、しるしというものが必ず起こるから、その時には「その時が世の終わりである。」ということをおなたがたは知るように、確認するように。そして、世の終わりであると知ったならば、それに応じた生き方が私たちにも求められていることも 1 つ言えると思います。1～2 節をまずお読みしたいと思います。『¹ イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。² そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してありません。」』宮というのはエルサレムの神殿のことです。ヘロデ大王によって建築された壮大な建物です。当時は世界の七不思議の 1 つにも実は含まれていたほどの規模でありました。ヘロデ大王が BC20 年に建築を始めまして、最終的にはヘロデ大王が死んでから大分経って AD 64 年にこの神殿は完成いたしました。その規模というのは南北 446m、東西 296m、壁の高さは 45m。10 階建ての建物以上の大きさがあったわけです。すべて大理石で造られております。大理石の積み木とイメージして頂いても良いと思います。それぞれの石の大きさは、長さは 8～12m、重さは 200～500 トンという石が積み残されているわけです。古代人がどうやってそのような石を切り出して積み上げたのか。そこが七不思議の 1 つというふうにも評価されるわけです。1 万 8,000 人以上もの人夫たちが動員されました。そんな荘厳な建物に弟子たちは目を奪われていたわけです。ところがイエスはその弟子の関心事を一つの話題として、世の終わりについて最後のメッセージをプライベートで弟子たちに明かすわけです。そしてイエスが驚くべき事を言ったわけです。2 節のところに言葉をもう一度読みたいと思います。「このすべての物に目をみはっているのでしょう。」壮大な巨大な神殿を前にしたら、「これは永遠に堅く建つ。これは決してなくなる。決して壊れない。古びることがない。」と。夕日に大理石が輝くと金色に見えたと言われています。黄金の神殿。「凄い。素晴らしい。芸術の極みだ。」と。でも、そのようなものも必ず跡形もなく崩れさるその日がやって来るんだと、イエスは預言されました。皆さんはどうでしょうか。皆さんにもヘロデ大王が造ったような神殿が目に見えるものに見えなくても心に奪われているかもしれません。「これはなくなるはずだ。これは素晴らしい。これは美しい。」そのようなものに目を奪われているのであれば、是非イエスの最後のメッセージに心を留めて頂きたいと思います。イエスはこの建物が跡形もなく完全に破壊されるのだと、ハッキリと預言しました。それは果たしてイエスの時代、1 世紀のうちに起こりました。AD70 年、イエスはもう十字架にかかって死なれ、葬られ、3 日目によみがえり、天には上げられています。弟子たちは生きていました。AD70 年、ローマの将軍ティトスによってエルサレムは陥落いたしました。その際、この大神殿も跡形もなく完全破壊されました。どうやったらそんな大規模な神殿を完全に破壊することが出来るのか。イエスが言われたように、石がくずされずに積み残されたまま残ることが決してないということが本当に文字通り起こったの

です。8～12m もの石、200～500 トンの石が積まれたままでない状態にまで破壊されるとは、一体どのような破壊の仕方を古代人はしたのでしょうか。ミサイルを何発か打てばそういうことも起こるかもしれません。核爆弾でも落とせば勿論それも実現するかもしれませんが、そんなものは勿論ないわけです。ですから、古代人の弟子たちにしてみたら(日本で言えば弥生時代の人です。)、信じられないわけです。そんなものが、石が積まれたままでない、跡形もなく完全に破壊されるなんて、そんな事はありえないと。ところが、それが起こったのです。歴史はそれがどのように成されたのかということ記録に残しております。エルサレム中の、(そこにオリーブの山があったわけです。)オリーブ山の近辺にあるすべてのオリーブの木をローマ軍は伐採して、それをあの大神殿の周りにくべました。そして火をつけたわけです。何日も何日も火は消えずに大理石は熱く熱く熱せられました。そしてそこにローマ軍は水をかけたわけです。そうすると大理石はまさにロケットで爆破されるような、撃破されるような形で大爆発をして、そして何百トンという石が四方に飛び散ったわけです。こういうことが実際に起こって、イエスの預言はまさに的中したということが、AD70 年に実現したわけです。そして、これから先に書かれていることもイエスが世の終わりに起こる前兆として、その時代の人にとってみたら「そんな事はありえない。普通じゃない。絶対大丈夫。」というようなことも、そうではないんだと。そのようにまずは **1 節 2 節** の神殿破壊の歴史上の事実を持って、しっかりとこれから先世の終わりに起こることに対して対処するようにと、私たちにも語られているわけです。

そして **3 節** のところを見て下さい。『**イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」**』この前兆はもう 2000 年前からあったわけです。先ほどの AD70 年のローマ軍のエルサレム陥落、そしてエルサレム神殿の大破壊。これも一つの世の終わりの始まりの出来事としては史実となっているわけですが、でもこれから後にイエスが述べられる世の終わりの前兆は、実は私たちの時代、すなわち 20 世紀において著しく激しく激化していくということです。このイエスの前兆なるものが 20 世紀になって著しく激化の一途を辿っていった、世の終わりが誰の目にも明らかであるということが起こってきているわけです。

4 節 から具体的な内容となっていきます。前兆として『**そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。」**』“惑わされないように”というフレーズは **24 章** の中では 3 回繰り返されており、この **4 節** が 1 回目です。次は **11 節**、そして 3 箇所目が **24 節** です。惑わされてはいけないと、3 回繰り返されているということは勿論強調されているわけです。世の終わりは惑わされやすい時代と、1 つ言えると思います。

ただ、いろんな惑わしがあるんですけども、具体的にはその続きを見て下さい。**5 節**『**わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。』**私こそキリストだ、という自称キリスト、自称メシヤ、勿論これは偽キリストのことです。そうした人たちが世の終わりになると多く出現するんだと、イエスは予告いたしました。事実、イエスではなくて、キリストを自称する者。自分が世を救うメシヤである、救世主であるというようなことを名乗る者というのは、世界中に多くおります。特に 20 世紀に入ってから、アメリカには 200 人ほどいると言われています。ちょっと前に有名になった事件がありました。デイビッド・コレスという人が「自分がキリストだ。」と名乗って、そして沢山の犠牲もそこにもなっていました。他にもインドには、キリストを名乗る者が 1,000 人以上いると言われています。身近なところでは、お隣の韓国の統一教会の文鮮明、彼は自称メシヤです。そして、皆さんの記憶にしっかりと焼き付いているオウム真理教の尊師と呼ばれた麻原彰晃も「自分がメシヤである。」と自称いたしました。松本智津夫被告であります。そのように世の終りになるとメシヤを名乗る者たちが、偽メシヤ、偽キリストが多く登場する。そして、それらを今日カルトなどとも呼ばれます。そうした台頭が目を見張るものとなるということで、世の終わりにはそのようなカルト宗教、これが乱立するんだということが 1 つ特徴として言えます。そして、それらのカルト宗教は人を惑わす、人心操作をする、マインド・コントロールをする、洗脳するんだということです。日本人の多くは無宗教とも自称しているわけです。そういう人たちは「宗教はまやかした。皆宗教は怪しい。宗教は人を惑わすもので、人の弱みにつけ込むんだ。乱世になるといろんな新興宗教が起こるんだ。」と。今のような金融危機、世界同時株安、いろいろな不安があるわけです。テロがあったり。そういう時になると宗教が起こってくるということで、「宗教は怖

いもの。だから、あんまり凝ってはいけない。ほどほどに。」とか、そんなアドバイスがありますけれども、でも多くの人は懐疑的です。「怪しい。危険だ。」と。そのように宗教が捉われるのは、まさにイエスが世の終わりのしるしとして言われているように、惑わす者が大勢現れるので人々も警戒するわけです。正統派のキリスト教ですら怪しいということです。

そしてマタイ 24 章 6 節『また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。』戦争のことや、戦争のうわさ。そしてそれは 7 節を見て頂くと、どのような戦争になっていくかと言いますと、『民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり』とあります。世の終わりに起こる戦争、これはこれまでの戦争とは違うものだといエスは言っています。民族対民族、いわゆる民族の紛争が世の終わりになると激化していくのだと。「そういう事は昔からあったじゃないですか。」と思うかもしれません。国と国が敵対する。この国という言葉の原語は集合体、連合体、いわゆる連合軍同士の戦争というのが正確な意味であります。連合軍による世界大戦。これが世の終わりになると勃発すると。そのような連合軍による世界規模の大戦争というものは、いつ初めに行われたかという、それは 20 世紀になってからです。1918 年あの第一次世界大戦です。死者は軍人ばかりではなくて、民間人も多かったと言われています。15%がこの戦争の民間人として犠牲者です。続く第二次世界大戦。これは 1932 年から 1945 年にかけて、この時には民間人の死者は軍人の死者数を上回ったと言われています。20 世紀はどの世紀をも上回る数の戦争が起こっているわけですが、私たちは 20 世紀に生きているのでそれがもう当たり前だと思っていますが、歴史を振り返ればそのような世界の連合軍による世界規模の対戦というのは、なかったことです。20 世紀になってからです。死者は 1 億人を超えております。今でも世界には 6 億人の軍人がいると言われていたりますが、科学者の半分は軍事産業に従事しております。

そして 7 節を見て下さい。その終わりの後半の部分です。『方々にききんと地震が起こります。』とあります。先に地震について述べたいと思います。3.11 に日本もこれまで想定外というような未曾有の大震災、大津波というものを経験してきたわけですが、イエスは世の終わりになると地震が方々に、これは地球規模で世界同時多発的に起こるというふうに予告しております。16 世紀から 20 世紀にかけて大地震と呼ばれるもの、それはマグニチュード 7 からマグニチュード 9.99 までのその大地震です。巨大地震というもののですが、その回数を今皆さんにお分かちしますので、16 世紀の大地震はどれくらいあったのか。普通の地震、大きくないマグニチュード 7 以下の地震というのが記録に残っている限りは 253 回あったと言われています。そしてたった 2 回だけがマグニチュード 7 以上の巨大地震だったと。それが 16 世紀です。17 世紀になると地震発生数は 378 回。少し増えています。勿論記録もその分文獻も残っているということなんですが、やはりその時も 2 回だけ。378 回の地震の中でたった 2 回だけが巨大地震ということです。18 世紀の地震の発生数は 640 回に跳ね上がります。そのうちの 5 回、たった 5 回だけです。巨大地震が発生しました。そして 19 世紀には 2,119 回、どんどん増えています。そのうちのたった 9 回が巨大地震でありました。2,119 回の地震の中でたった 9 回です。そして 20 世紀の地震の発生数は 9 万 1,000 回。そのうちの巨大地震、これは 198 回。マグニチュード 7 以上の地震が 198 回も 20 世紀の内に起こった。これは急な増え方というふうに皆さん思われると思います。それは勿論 20 世紀の話です。21 世紀になれば、(もうなっていますが)この大地震の頻度、それはまさに激増しているというのは、もう皆さんは肌で感じておられると思います。この勢いは止まりません。これまで人類はこれほどまでに巨大地震を頻繁に体験した事はなかったわけです。世の終りのサインです。

そして、その前に飢饉もあるとあります。毎日 1 万 5,000 人もの人たちが世界中で餓死していると言われています。原因は年間日本の 100 倍規模の砂漠化が 1 つ言われています。民族紛争もあると思います。人口爆発もそのうちの 1 つの理由と考えられます。1800 年代初頭、世界人口は 10 億人しかいませんでした。1900 年までには人口は 16 億に増えました。1999 年には 60 億人を突破しました。19 世紀 6 億人増が、20 世紀には 44 億人増ということで、これも急増ということです。その結果飢饉も伴ってくるわけです。現在十分に栄養の採れていない飢餓人口というものは 9 億 6,300 万人世界中にいると言われていたります。毎年毎年これは増加傾向にあります。1,500 万人、4 秒

に1人の割合で飢餓が原因で死亡しているとも言われています。国際連合開発計画の委託を受けた2000年度の人間開発白書という資料によりますと、1日1ドル以下で生活している絶対的貧困層というのがありまして、1995年の10億人から12億人に(5年間で2億人増えているわけです。)増加しており、世界人口の約半分にあたる30億人は1日2ドル未満で暮らしている。にもかかわらず、世界の食糧生産総量は、世界中の人々を養うに十分な量があると言われています。というのは、世界の肥満、これは食糧の摂取のし過ぎという肥満です。その人数は世界で飢えている人とほぼ同人数と言われているからです。豊かな国は必要量以上の食料を輸入していて、食料を捨て過ぎているというのが現実であります。もったいないと言われています。例えば東京都23区の家から一日に捨てられる食物というのは、アジアの50万人以上の人たちが1日に食べる食料に相当すると言われています。このような飢饉が、世の終わりになると激増するとイエスは預言されました。このイエスの預言は今から2000年前、日本の弥生時代の話であります。

そして、この**マタイ24章**の並行記事が他の福音書にあります。**ルカの福音書21章11節**のところを、(並行記事というのは同じ内容をルカという人が記録しているわけです。)見て下さい。**マタイ**にはない兆候・しるしというもの、前兆というものがあります。ちょうど前後を見て頂くと**マタイ24章**と同じことを言っているという事は一目瞭然だと思えます。**11節**のところには『**大地震があり、方々に疫病やききんが起り、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。**』マタイにない部分というのは、この疫病であります。疫病も流行るということです。この疫病という言葉は、原語では、ギリシャ語では、やはり「**コントロール不能な病**」単なる疫病というよりも、むしろ現代の言葉で表現するならば、パンデミックというような疫病であります。もう世界中に蔓延してしまう。かつてのペストみたいなものです。黒死病とか。エイズ、HIVというものもそうです。感染者は世界で毎日のように8千人も感染していると言われています。新型インフルエンザとか、いろんなウイルスがまた人類にとっての脅威になっています。1度このパンデミックが起きたら壊滅的なダメージがあるということも指摘されているわけですが、そのような疫病が、文字通りはコントロール不能な病、そのような病がやはり世の終わりになると蔓延するんだと。

そして、またテキストの方に戻って頂きたいと思えます。**マタイ24:8**『**しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。**』産みの苦しみの初め、すなわち序章に過ぎない。いま私が皆さんにお分ちした世の終わりの前兆というのは、もう既に私たちもある一定の部分では経験しているところであります。でもそれは、産みの苦しみの初めに過ぎない。産みの痛みというのは勿論赤ちゃんを産むということなんですけれども、その意味というのはイエス・キリストが再び戻って来られるという産みの痛みであります。これらの事が起り始めたら、陣痛が始まったら、イエスがこの世にもう一度戻って来られるその日が近いことを知るように。そして、イエスが戻って来られたら、再臨されたら、神の国が到来するわけです。ですからいろんな災害、悲劇、戦争、飢饉が起きますけれども、でもそれは産みの苦しみの初めであって、必ずイエス・キリストが戻って来られたらすべての不条理は必ず解決されるということです。間違いは正されるということです。呪いは祝福に変わるということです。

9節の方に今度は目を移して下さい。『**そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。**』これは、世の終りになるとイエス・キリストの弟子たち、すなわちキリスト教に対する迫害というものが表面化してくる、激化してくるということです。今でもキリスト教たちは世界中で迫害されております。特にイスラム圏とか、または共産圏というところでは、文字通りキリスト教たちは弾圧を受け迫害されて、そして拷問され処刑されております。かつてローマ帝国時代にも沢山のキリスト教たちは迫害され殉教したわけなんですけれども、日本でも徳川時代には何十万、何百万というキリスト教たちがやはり拷問の末殺されてきたという悲しい歴史を私たちは知っております。でも、明治に開国と同時にプロテスタントが日本に入ってきてから、ちょうど昭和の戦争の時代(第二次世界大戦、太平洋戦争のその時代です。)やはりキリスト教たちはこの国内でも激しい弾圧を受けました。迫害があったんです。その数は延べ60万人とも100万人とも言われています。私たち日本人のプロテスタントのキリスト教たちもまた多く迫害されてきた、これは昭和の時代です。つい最近のことだということを感じて欲しいと思えます。

実際に 1 世紀から 19 世紀までの間に殉教したクリスチャンの数を全部合わせたよりも多くの殉教者が、実は 20 世紀のたった 1 世紀の中で起こったということも知って欲しいと思います。1 世紀から 19 世紀にも沢山のクリスチャンたちは死にました。有名なのはあの皇帝ネロによるクリスチャンたちの迫害です。でも 20 世紀にはすべて合算した数よりも、1～19 世紀までの間に死んだクリスチャンたちの殉教者数を合算したものよりも、たった 1 世紀の中の 20 世紀に限って見るだけでも、遥かにその数は凌駕しているということです。この殉教者が大量に続出するという勢いは 21 世紀になっても衰える事はありません。実際に世界の 80 カ国では 2 億人を超えるクリスチャンたちが今も迫害下にあります。毎年 10 万 5,000 人～17 万 1,000 人のクリスチャンたちが信仰のゆえに殺されているんです。皆さんはあまり考えたことがないかもしれません。今年の 2011 年の 1 月 18 日にキリスト教団体の open doors というグループが世界の迫害状況のレポートを毎年出すのですが、それによって 9 年連続で北朝鮮が最も激しい迫害をクリスチャンたちに加えているということでまたニュースになりました。ちょっとそのニュースも皆さんに読み上げたいと思います。『北朝鮮が 9 年連続で世界でキリスト教徒らに対する迫害が最も激しい国家に選ばれた。国際キリスト教布教団体の open doors が 17 日にウェブサイト公開した 2011 world watch list によると北朝鮮はキリスト教弾圧国 50 カ国の中で迫害順位は 1 位となった。open doors は、北朝鮮では住民たち全てが指導者の金日成を崇拝するように強要されており、北朝鮮政権はキリスト教徒の存在権利まで否定していると指摘した。この団体は各国の宗教迫害程度を点数で換算し、北朝鮮は 100 点満点の 90.5 点。北朝鮮が 100 点満点を記録しないたった 1 つの理由は、公式には宗教の自由を認めているからだ、と説明した。特に open doors は、昨年に北朝鮮で逮捕されたキリスト教徒が数百人に達し、これらの中の一部は命を失ったとまとめた。open doors はそれとともに、強制収容所に生きているキリスト教徒は 5～7 万人に達すると推定した。また昨年 5 月、平城市^{ピョンソン}である地下教会が発覚した直後、集会に参加したキリスト教徒 3 人が直ちに処刑された。他の 20 人も強制労働収容所に送られた、と具体的な事例を上げた。open doors は、北朝鮮がキリスト教徒を探し出すため、自己批評会議や抜き打ちの家宅捜索などを利用している。さらに教師は幼い学生に「両親が黒い本(聖書)を読んでいないか調べなさい。」という指導もしている。この他にも open doors は、脱北者の証言を引用し、脱北者が中国で捕らえられ北朝鮮に送還されてからの調査過程で必ず否認しなければならない質問として「キリスト教徒と接触したか。聖書を読んだか。」ということを紹介した。』そのような現実が今でもあります。私たちはこの日本に居て、信教の自由が保障されております。北朝鮮ほどの迫害は勿論ないわけですが、でも身近なところではクリスチャンになって馬鹿にされたり、ちょっと生活しづらいとか、仕事しづらいとかいうこともあるかもしれません。理解されないとか。でも、文字通りクリスチャンたちが今もその信仰のゆえに命を落としている。もしイエスを信じるならば家族も迫害される。仕事も奪われる。財産も奪われる。そして文字通り肉体にも危害が加えられる。そういう国が、そういう地域が今でもあるということを感じて欲しいと思います。そういう国々を思う時に私たちは、何と幸いかと。本当にこれは恵みだと。何のリスクもないわけです。せいぜい理解されないとか、馬鹿にされるとか、口汚く罵られるとか、その程度であります。でも是非これもまた主に感謝をして頂きたいと思います。私たちは自由にイエス・キリストのことを宣べ伝えられることが出来るわけです。何の制限も受けません。これを特権と思って欲しいと思います。

10 節に目を移して下さい。『また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。』友だちだったのに、味方だったのに、仲間だったのに。世の終わりになると平気で人を裏切る、そういう社会風潮となっていきます。これは勿論クリスチャンと呼ばれる兄弟姉妹の中にも起こってくることです。互いに愛し合う兄弟姉妹であるはずなのに、敵対し合う、反目しあう、教会が分裂分派を起こす。こういう動きが世の終わりになると激化するということです。表面化するということです。ただクリスチャンにとってお互いが敵ではない事は確認しておきたいと思います。考え方が合わなくても、私たちはイエスを信じる以上敵ではありません。意見は合わないかもしれません。食い違ってもいいかもしれません。考え方も、教会観も、信仰観もズレがあるかもしれませんが、でもイエス・キリストを信じるならば私たちはお互いに敵同士ではありません。敵はたった 1 つとか、1 人とか、それはサタン・悪魔であります。

11 節を見て頂くと『また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。』キリスト教系の異端を始めた人

たちは、自ら預言者を名乗りました。勿論彼らは偽預言者です。エホバの証人も、モルモン教徒も、統一教会も皆それぞれ創始者は、自らを預言者と自称して、そして非聖書的な教えを持って人々の心を惑わしているわけです。そのような異端も、カルトというものも、世の終りになると乱立してくる。昔からあったものでも特に世の終わりにになると増えてくる、急増するということです。

他の聖書の箇所も皆さんに参照して頂きたいと思います。第一テモテ 4:1『しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると(世の終わりのことです。)、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。』ある人たち、というのは、これはかつては正統派の信仰を保持している教会に属していた人たちも、惑わす霊と悪霊の教えに心を奪われて、その正統派の信仰から離れてしまうようになる。エホバの証人も、モルモン教徒も、統一教会もそれぞれの創始者は、元々はいわゆる正統派のキリスト教会に通っていた者たちです。

他にも第一ヨハネ 2:18~19 も参照したいと思います。『¹⁸ 小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。(この反キリストというのは、1 人の特定の反キリストではありません。聖書には2種類の反キリストが存在します。ここは複数形です。単数形の反キリストは、後にヨーロッパからキリストに取って代わるような、キリストに対抗するような悪魔の化身というふうな世界総統が現れます。EU の最終的には指導者となって世界を政治的にも、軍事的にも、宗教的にも支配する者が世の終わりに現れます。そのたった 1 人の反キリストとは別に、ここでは複数の反キリスト。反キリストのような、似たような人たちが大勢現われてくるわけです。)それによって、今が終わりの時であることがわかります。(このような複数の反キリストというのは、キリストに対抗する、キリストに似たようなことを言ったり教えたりするのですけれども、しかし彼らは偽ものであります。偽預言者と言っても良いと思います。これは教会の外だけの話をしているわけではありません。特に世の終わりにになると教会の中でそのような偽預言者が横行するようになる。騙されいくわけです。クリスチャンと呼ばれる人たちも騙されていくわけです。)¹⁹ 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。』

もう1箇所、第二テモテ 4:2~5 も読みたいと思います。この第二テモテ、これはパウロの絶筆となったものです。後継者の若い牧師のテモテに最後に宛てた手紙です。これが絶筆ということ。この後パウロは、あの狂人皇帝ネロに首をはねられて殉教します。最後の遺言として、『² みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。(次に注目して下さい。)³ というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、⁴ 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。⁵ しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。』と。偽預言者たちが横行します。惑わしがあります。彼らは聴く者を健全な教えから離れさせていきます。作り話、空想話をします。非聖書的な教えで、肉的な思いを、欲望を満たすような、自己実現だとか、自分の願い通り欲しいものが手に入る、欲しいままに成功が手に入る、「ささげなさい。そうすればあなたは祝福される。」と言って、そしてこの世の成功を説くような、そういう教えも多く教会の中でも成されています。でも私たちクリスチャンが求めるべき目標、ゴールは、イエス・キリストの似姿に変えられること。これが健全な聖書の教えであります。この世で金持ちになること、健康になること、成功すること、有名になること、これは聖書の目指すゴールではありません。ところが教会の中でそのような成功哲学がまことしやかに、如何にもそれが聖書の教えであるかのように教えられております。どうやったら教会を大きく出来るかとか、どうやったら献金をたくさん信者から絞りあげることが出来るだろうかとか、そういうことが教会の中でも教えられるわけです。神学校でも教えられるわけです。でもそれは、世の終わりの前兆の1つであると。

テキストの方に戻って頂いて、マタイ 24:12『不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。』世の終わりにになると不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなる。愛が、自然の情愛も完全に冷たくなってしまふ。

これについてやはりパウロという人が先にも開いた**第二テモテ 3:1~5** のところでいろいろな言葉で具体的に神の愛が冷めてしまう、冷たくなってしまふ、冷え切ってしまう、ということ表現していますので、そこも今読ませて頂きたいと思います。『**1** 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。**2** そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、**3** 情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、**4** 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、**5** 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。』多くの人たちの愛は冷たくなりますが、どのような冷え方をするかと言うと、人よりもとにかく自分。自分を愛すること、金を愛すること、神を汚し、両親に従わない、感謝することを知らない、汚れた者、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、とあります。これについて皆さんは、まさに世も末だというような愛が欠けている、愛が完全に冷め切っている、そんな凶悪な事件というものを持って確認出来るかと思ひます。今月もショッキングなニュースがありました。ニュースの見出しに『餓死の二歳児。空腹で紙おむつを食べていたか。』これもニュースですから読み上げます。『千葉県柏市で 2 歳の長男を餓死させたとして両親が逮捕された事件で、長男は空腹から履いていた紙おむつを食べていたとみられることが分かった。この事件では死亡したコサカソウシちゃん(当時 2 歳 10 ヶ月)の父親で無職ユウゾウ容疑者 39 歳、母親サトミ容疑者 27 歳が、9 日に保護責任者遺棄致死の疑いで逮捕される。警察によるとユウゾウ容疑者は容疑を否認しているが、調べに対し「子供は猫と同じぐらい可愛かった。ミルクを飲ませるためにコーラと混ぜて飲ませるなど手は尽くした。」と話していることが新たに分かった。ソウシちゃんの体重は 5.8 キロしかなく、約 2 年半にわたり十分な栄養が与えられていなかったと見られている。またソウシちゃんの腸の中からは、プラスチックや紙の破片が見つかっていて、警察は空腹から履いていた紙おむつを食べていたと見て調べを進めている。』と。信じられないような事件が、これに始まったわけではありません。本当に昨今はこのような事件がもう日常のように私たちの耳に入ってくるわけです。イエス・キリストが「**世の終わりにになると不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。**」と言われている通りであります。

他にも、日本は昔から、今でもそうですが、“**中絶天国**”と呼ばれております。厚生労働省の統計によりますと、2008 年に(ちょっと古いデータですが)日本で行われた人工妊娠中絶は 24 万 2,292 件とされていますが、それは年間出生数約 110 万人の実に 4 分の 1 にあたります。これはあくまで母体保護法に基づいて届け出がなされた人工妊娠中絶の数であって、氷山の一角に過ぎないわけです。実は 1 年間に人工妊娠中絶の総数、実数というもの、これは 500 万件以上に上ると言われております。実に 1 日に 1 万人以上の胎児が殺されているわけです。この日本だけで、7 秒に 1 人、今も日本のどこかで胎児は殺されています。4 人に 3 人、6 人に 5 人の胎児が産声を上げることなく尊い命を奪われているわけです。ちなみに昨年の 2010 年の 11 月 1 日に、これもニュースになった事ですが、中国で届け出があった人工妊娠中絶の手術件数は年間 1,300 万件に上って、WHO(世界保健機関)の報告にある全世界の年間人工中絶手術件数の 4 分の 1 を占めることが分かりました。世の終わりにになると不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。これもまたイエス・キリストが語られた、世の終わりの前兆の 1 つであります。

私たちクリスチャンも愛が冷めてしまうことがあります。熱く燃えている愛でも、例えばクリスチャンによる、または牧師による不法です。牧師の金銭スキャンダル、セックススキャンダル、セクハラだとかパワハラ、こういったことも昨今日本の週刊誌にもたびたび取り上げられるようになりました。法廷で醜い争いが繰り広げられています。教会の中の実態が、世間の好奇の目に曝されているわけです。そうした事を聞けば聞くほど私たちは冷めてしまひます。ショックを受けるだけではなくて、幻滅するわけです、失望するわけです。霊的虐待という言葉もあります。信仰による虐待という言葉もあります。信仰を押し付けて、マインドコントロールのカルトの手法を使って牧師が信者を自分の願うように、思うままにコマのように使うわけです。そのような教会は、“**バイブル・カルト**”などとも呼ばれています。権威主義に陥った牧師たちがカルトの手法を用いて、そして教会をカルト化させてしまふ。こういうことも世の終わりになる

と多く見られるようになります。

そして、**13節**に『**しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。**』“しかし”という言葉が大事であります。私たちは世の終わりにあって様々な苦しみ^いに直面しなければなりません。この中にも沢山の苦しみを今受けている方もいると思います。しかし、**最後まで耐え忍ぶ者は救われます**と。これらの苦しみはすべて産みの苦しみの初めに過ぎないと、イエスは言われていたことを思い出して下さい。産みの苦しみ、今は苦しいかもしれません。でも、待望のものがやってくるのです。この中にもお母さん方が大勢いますので、よく分かると思います。「私は陣痛が大好き。」なんて言う人はいないと思います。でもその結果、尊い命が、素晴らしい祝福がもたらされるならば、その苦しみも厭われない。産みの苦しみの初めに過ぎません。ですから、最後まで耐え忍んで下さい。必ずイエス・キリストは戻って来られます。この苦しみは、意味のない苦しみではないということも覚えて下さい。世の終わりにあって患難は避けられない。これはイエスも言われているところでもあります。だから苦しい目にあっても逃げてばかりしないで下さい。迫害も避けられません。パウロは言いました。「**キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者は、間違いなく 100%迫害を受け**ます。」と。皆全員漏れなくです。ですから是非、すべては産みの苦しみの初めなんだという認識を持って、必ず今はまだ苦しいままでけれども、でもイエス・キリストが戻って来られる日にはすべては希望に変わると。耐え忍ぶという事、これはクリスチャンは「出来ない。」と言えないものであります。なぜならば私たちには神の愛が注がれているからです。**第一コリント13章**にその神の愛が描写されています。『**愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。(愛は)すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることはありません。**』この愛があるからこそ私たちは耐え忍ぶことが出来るのです。でも、この愛がなければ、もう投げ出します。「もう嫌だ。もうこんなつらいのは嫌だ。」ある人たちはお酒に走るかもしれません。現実逃避をして、ある人たちは薬に走るかもしれません。ある人たちは快樂、娯楽、ギャンブル、出会い系サイト、ポルノサイト、いろんなところに逃げ場を求めるかもしれません。「もうこんな苦しい目に遭いたくない。」麻薬に走る人もいるかもしれません。趣味だとか、スポーツだとか、そういうものに打ち込む。それですべてを忘れようという人もいるかもしれません。でも、愛がなければ必ず行き詰まります。必ず愛がなければどうにもならないところにまで陥っていきます。苦々しい思い、失望感、諦めしかありません。でも、愛があるならば、すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待出来ます。

他にも**第一ペテロ 4:7~8**にこういう言葉があります。『**7 万物の終わりが近づきました。(これも世の終わりの表現です。万物、すべての終わりが近づきました。)ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。**』万物の終わりが近づいたら、私たちクリスチャンは何をすべきか。苦しいです。つらいです。逃げ出したいと思います。何もかも嫌になってしまうかもしれません。クリスチャンの間ですらうまくいかない。反目し合う、対立し合う。ノンクリスチャンからも圧力をかけられる、弾圧される、迫害されることもあるかもしれません。教会の中で、非聖書的な感わしの教えによって振り回され、傷つけられ、「もう教会なんか行きたくない。こんなに傷つけられて、私にはもう教会は要らない。あの牧師先生に心から信頼を置いていたのに、ひどく裏切られた。だからもう教会には行かない。もう教会アレルギーです。“牧師”なんて聞くだけで、“教会”なんて聞くだけで、もう拒否反応、生理的に受け付けられないんです。」でも、万物の終わりが近づいたならば、『**祈りのために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。**』と。この愛によって私たちは、すべてに耐え忍ぶことが出来ます。

ですから、**ヘブル 10:25**にもこのように言われています。『**ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日(イエス・キリストが戻って来られるという“かの日”が)近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。**』教会に集まっているのはなぜでしょうか。クリスチャンだから、義務だから、日曜日だから、伝統だから。ではなくて、私たちは互いに愛し合うために、励まし合うために、イエス・キリストが来られる時を確信しているからこそ集まっているわけです。1人では耐えられないかもしれません。1人ではもう苦しくてどう

にもならなくて、何もかも投げ出したくなるかもしれません。でも私たちには、互いがあるのです。主にある兄弟姉妹が与えられているのです。神の家族がここに集められています。だから逃げないで下さい。目をそむけないで下さい。下を向かないで下さい。心を閉ざさないで下さい。諦めないで下さい。

最後に **14 節** のところも一応テキストにあったので、そこを見てまとめたいと思うのですが『この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。』世の終りになると世界宣教の活動が目覚ましい躍進を遂げていくということも、世の終わりの 1 つのサインであります。1 世紀の世界人口に対するクリスチャンの人口比は 360 対 1 でありました。360 人に対してたった 1 人のクリスチャン。ところが 1990 年になりますと、全世界でクリスチャンは 7 人に 1 人となりました。誤解しないで欲しい事は、海外宣教に力を入れることでイエス・キリストが戻って来られる日が早められるということではありません。キリストの再臨を早めるために伝道するものではありません。1 人でも多くの魂が永遠の滅びから、このような困難な時代から守られ解放され、そして自由を、喜びを、平安を得るために、そして死んでもなくなる永永遠の命を得るために、イエス・キリストを伝えると。これが私たちの勿論愛による動機であります。ただ世界宣教が進む事は確かに世の終わりの 1 つの前兆であるということも認めていきたいと思えます。2000 年にわたる教会のすべての働きの 7 割が 20 世紀に入ってからの実績であると言われております。さらに 20 世紀全体の 7 割は 1945 年以降の 50 年に成し遂げられたと言われております。その 50 年全体の 7 割は 1990 年からの 5 年間です。その 5 年間の全ての 7 割がここ 3 年間で、これは 1996 年の調査ですのでもっと古いですけれども、本当に近年になってから、20 世紀末になってから世界宣教が驚くばかりのスピードで進んでいるわけです。

アフリカでは 1 日平均 2 万人もの人たちがイエス・キリストを信じる決心をして救われています。毎日です。2 万人です。中国の南部でも毎日 2 万 5,000 人がイエスを信じるという信仰告白をしていると言われております。今や中国が世界最大のキリスト教国家と言っても差し支えないと思えます。勿論共産圏で、勿論キリスト教は、クリスチャンたちは、迫害下にあります。でも、地下教会において沢山の人たちが救われております。1 億人以上のクリスチャン人口を抱えているキリスト教大国、これが中国であります。韓国では毎日 7 つの教会が誕生していると言われております。全部 20 世紀末にこのような目を見張るような宣教の働きが展開されているということでもあります。

ただ、全世界の人たちがクリスチャンになってから世の終りが来るという話ではありません。実際に私たちは、まだまだ世界にイエス・キリストの名前すら知らない、聖書なんか見たことないと言う人たちが多くいることを知っております。でも世の終りになると、くまなくイエス・キリストの福音が宣べ伝えられるということもまた聖書の世の終わりの預言に書かれています。これについて今話す事はいたしませんけれども、教会が地上から取り去られるという携挙の後に、人類最後の 7 年間の患難時代というのがやって来るのですが、その患難時代の中にそのことが文字通り実現します。ユダヤ人たちの 14 万 4,000 人の人たちが、イエス・キリストを信じて世界中に、一人一人がパウロのような熱烈な宣教者として遣わされていきます。その後には 2 人の証人と呼ばれる人が、これはモーセとエリヤの再来と思われれますが、現れます。彼らも力強い働きをして、多くの人たちは彼らの宣教によっても救われます。そればかりではありません。神の御使いが、天使が直接永遠の福音を携えて、文字通り世界のすべての民族のところに福音を宣べ伝える。そのことも全部聖書に預言されています。これは**黙示録**の方に詳しく書かれていますことですけれども、ですから、私たちが今のうちに世界中に福音を宣べ伝えておかないとイエス・キリストがいつまで経っても戻って来ない、という話ではないということです。

マタイの 24 章 14 節 までが今日のテキストであったわけですがけれども、皆さんにお配りしている週報の方にも世の終わりの前兆として最も顕著なものを取り上げましたので、それもまたゆっくりじっくり読んでみて下さい。世の終わりの最も顕著なしるしというのは、1,900 年間も失われていたイスラエルという国が復興する。そして、国として独立するという、そのことがイエスによって預言されていたわけです。**マタイの 24 章**の中に、特に **31~33 節**に、その週報にもその箇所が記してあります。1948 年、やはり 20 世紀です。5 月 14 日にイスラエル共和国は独立を果たしました。これは奇跡だと言われたわけですが。1,900 年間も祖国を失って、世界中に離散していたユダヤ人たちが再

び祖国を取り戻す。あんなに迫害されていた民だったのに、ホロコーストの時には600万人も虐殺されたのに、それでもなおユダヤ人たちは祖国を取り戻したわけです。これは奇跡だと言われています。1948年にもう一つ世の終りの前兆の最も顕著なものが実現したということも、心に留めておいて下さい。

そして、**マタイの24章42節**以降が、今まで私がお話したことの結論になっております。**42節**以降が、イエス・キリストの世の終わりの前兆、それを一つ一つ列挙した中で結論としている部分です。『⁴²だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。⁴³しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。⁴⁴だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。』人の子とは、イエス・キリストのことです。イエス・キリストは思いがけない時に来ると。今までの前兆、一つ一つ皆さんも心に留めて頂いて、そして実際にそのような前兆が今身の回りで起こっていると見るならば、イエス・キリストは思いがけない時に来られるということを知って下さい。目を覚まして下さい。今がどういう時代なのかということこそ是非認識して頂きたいと思います。思いがけない時、どういう時でしょうか。イエス・キリストが戻って来られる時、思いがけない時です。夫婦喧嘩している時、まさかその時にイエスが戻って来られるとは多分思っていないと思います。もしイエス・キリストが戻って来られると認識していれば、夫婦喧嘩は必然的にしなくなると思います。晩酌でほろ酔い気分の時、イエスが戻って来る。まさか、良い気分なのに。テレビをぼーっと見ている時、思いがけない時、イエスが戻って来られるかもしれません。また「今日は疲れているし、面倒くさいから、教会をサボろう。」そう思った時、イエスが思いがけない時に戻って来られるかもしれません。または教会の人のことを悪く言っている時「あの人はどうだ、こうだ。」と、そんなネガティブな話をしている時に、もしイエス・キリストが戻って来られたらあなたは赤面するどころか青ざめてしまうと思います。教会はキリストの体であります。教会はキリストの花嫁です。花嫁のことを馬鹿にする。花嫁のことを見下げる、嫌な印象を持つ。これは、花婿はどのように思われるかということをやはり考えなくてはなりません。思いがけない時にイエス・キリストは戻って来られます。ネットで、携帯で、スマートフォンであなかが何か見ている時、その時に、ゲームでもしているその時に、ポルノサイトでも見ているその時に、イエス・キリストは戻って来られるかもしれません。思いがけない時です。まさか。教会に集っている時は、皆さんはそれなりの意識を持って期待をするかもしれません。でも教会を一步出てしまえば、仕事ではイエスなんて忘れてしまうかもしれません。でも、そういう時こそが思いがけない時です。教会ではある程度心備えをして来るかもしれません。でも、教会の外ではどうでしょうか。家ではどうでしょうか。プライベートではどうでしょうか。思いがけない時です。「牧師のメッセージが長いな。」とと思っているその思いがけない時、イエス・キリストは戻って来られるかもしれません。私たちは勿論イエス・キリストを知っている者ですから、今までの話も周知のことで勿論イエス・キリストが戻って来られることに何の不信もなく、むしろ心の底からそのことを信じ期待していると思います。ただ、私たちは忘れやすいものです。弱いものです。頭では分かっている、現実が、実生活が、そうでない場合があるわけです。そのような私たちに対してイエスが最後の説教を語って「目を覚ましなさい。」そして「用心しなさい。」と。間違いなく100%イエスが戻って来られます。

24章45節から終わりのところを読んで、自分がイエスにとってどのような存在か。主のしもべとしてどうだろうか。考えて頂ければと思います。『⁴⁵主人から、その家のしもべたちを任されて、食事の時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。⁴⁶主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。(そのように見られるしもべです。イエスが戻って来られる時、不倫しています。そこにイエスが戻って来られたらどうでしょうか。イエスはあなたの振る舞いを、言動を、いつでも見ておられます。そこに戻って来られるということを知って下さい。)⁴⁷まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せられるようになります。⁴⁸ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき(クリスチャンたちを馬鹿にし、罵り、文句を言い、不平を漏らし、批判をし)、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、(この世を謳歌しているということです。「まだイエスは戻って来られない。」)⁴⁹そのしもべの主人は、

思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。⁵⁰ そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。』皆さんは悪いしもべではないことを私は信じております。「否、私は悪いしもべです。」と、「もう私には希望もありません。罰せられるだけです。泣いて歯ざしりするだけです。」と、そのように思われている方があるならば、それは思い過ごしだと思って下さい。もし、たとえですけれども、万が一にでもあなたが悪いしもべであっても、今この時【主】があなたに悔い改めのチャンスと、その恵みを与えておられることを知って下さい。あなたには良い忠実な賢いしもべになって欲しい、と【主】は願われているので、今日ここにあなたは招かれて来たのです。悪いしもべで居座っているならば、もうそのようにあなたが心に定めているならば、あなたはここには呼ばれなかったと思います。教会にも来なかったと思います。でもここに来た限りは、皆さんは必ず良いしもべとして、賢いしもべとして、思慮深いしもべとして、【主】が招かれた。そして、そうでなくてもそのようになれるように、悔い改めて立ち返るように、今この時間が備えられたということを知って、落ち込まないで欲しいと思います。むしろ「なんと自分は愛されているだろうか。こんな私が見捨てられることもなく、見放されることもなく、このような私がこのような場に招かれて感謝です。」と。悔い改めとともに確実にその罪は赦され、そしてあなたは確実に変えられるということ、成長するという、悪いしもべから良いしもべに変わるということを知って、そして【主】に期待をして頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。